

# ナイチンゲール病棟の設計思想とプライバシー —時代背景にみるプライバシーの捉え方—

岩田直美<sup>1)\*</sup>, 笹木葉子<sup>1)</sup>, 辻慶子<sup>2)</sup>, 松本真希<sup>3)</sup>, 長多好恵<sup>4)</sup>, 児玉裕美<sup>2)</sup>, 萩原智子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>名寄市立大学保健福祉学部看護学科, <sup>2)</sup>産業医科大学, <sup>3)</sup>北海道文教大学, <sup>4)</sup>札幌医科大学

**【要旨】** 著者らは、看護学生を対象にナイチンゲールが考案したナイチンゲール病棟に関するイメージ調査を行った結果、患者のプライバシー確保に関して否定的な回答がみられた。

そこでナイチンゲールがプライバシーをどのように捉えているかを、ナイチンゲール著作集で確認すると、看護師側のプライバシーについてのみ記述され、患者側のプライバシーを守ることについての記述はなかった。そこで、ナイチンゲール病棟が提唱された1860年代からの英国文学作品6作品を用い、羞恥心への認識と、質問紙により現代の看護学生が感じる羞恥心レベルについて調査し、ナイチンゲール病棟の設計思想と現代におけるプライバシーの捉え方について検討した。

文献検討では、その時代前後で、病院の患者の階級や求められる医療が変化し、プライバシーが必要になった。ナイチンゲール病棟を提唱した時期はちょうどその過渡期であり、プライバシーへの十分な配慮がなされていなかったことが示唆された。

看護学生のアンケート調査では、患者が治療を受ける場合、特に身体の一部が露出されるときに羞恥心があると答えていた。ナイチンゲール病棟については、看護者の目が行き届き安心感を与えるが、患者のプライバシーがないと捉えていた。

**キーワード:** ナイチンゲール病棟, プライバシー, 歴史

## I. はじめに

著者らは、ナイチンゲールが考案した「ナイチンゲール病棟」に関する調査の結果を発表した(辻・松本ら 2017)。学生は、「開放感がある」「患者の観察が容易」「周囲とのコミュニケーションが取りやすい」というように、ナイチンゲール病棟を好ましく感じる者が多かった。しかしその一方で、「プライバシーがない」「個人の空間がない」「周囲の患者が気になる」というように、患者のプライバシー確保に関して、否定的な回答もみられた。学生がプライバシーがないとみなした結果を受けて、ナイチンゲールが“プライバシー”をどのように捉えているかについて『ナイチンゲール著作集 (Collected Works of Florence Nightingale)』を翻訳し検討した。しかし、ナイチンゲールの著作で見られる“プライバシー”が含まれる文章中で使われているのは、「ナースはプライバシーを守るためにナース専用の部屋を

もつべきである」「ナースはすべてのプライバシー(隠れ家や自宅)で、休息をとらなければいけない」(Florence Nightingale, 1863) といったいずれも看護師側の立場からのプライバシーであり、患者側のプライバシーを守ることについての記述は見られなかった。

現代におけるプライバシーの定義について、鈴木(2005)は、「プライバシーの定義は曖昧であり、(中略)他者の視線から切り離された独立した私的な空間こそがプライバシーのある場所だ」という認識があるのではないかと述べている。著者らの先行研究結果(辻, 松本ら 2017)では、看護学生がナイチンゲール病棟にプライバシーがないと感じた要因は、他者の視線を受けることが多い、あるいは一人になれる空間がないことと捉えていた。

そこで本研究では、看護学生の視点から、現代における患者のプライバシーへの考え方とナイチンゲール病棟の設計思想を検討し、時代背景にみるプライバシーの捉え方を考察することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 研究デザイン

文献検討および質問紙調査。

2020年10月15日受付: 2021年1月29日受理

\*責任著者 岩田直美

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1

E-mail: [naomi-i@nayoro.ac.jp](mailto:naomi-i@nayoro.ac.jp)

## 2. 研究方法

### 1) 英国文学による文献検討

ナイチンゲールの著作、およびナイチンゲールが活動した 19 世紀の代表的な英国文学作品から、現在デジタルデータで入手できる全集 6 作品を検討対象とした。各文献において「プライバシー (privacy)」の単語が登場する頻度について、10 万ページあたりに「プライバシー (privacy)」が登場する頻度を算出した。検討文献は

- ・ジョナサン・スィフト全集
- ・チャールズ・ディケンズ全集
- ・ウィリアム・サッカレー全集
- ・ブロンテ姉妹全集
- ・ジョゼフ・コンラッド全集
- ・HG ウェルズ全集

であった。

### 2) 質問紙調査

#### (1) 対象者

A 看護大学に通う 1 学年のなかから同意が得られた 69 名 (女性 66 名, 男性 3 名)

#### (2) データ収集方法

スライド提示式無記名自記式質問紙集合調査にて、各場面で、1 (まったく恥ずかしくない) から 10 (とても恥ずかしい) の 10 段階で回答を得た。提示する際には、イラスト 1 スライドにつき 1 分間表示し、イラスト番号の乱数を用い、乱数に従って対象者に提示した。

#### (3) 調査項目

病院内で患者が経験する日常的に経験する以下の 4 場面のイラストを選択した。

- ・車いすに乗って検査室へ向かう (以下、車椅子と略す)
- ・松葉杖を使って歩く (以下、松葉杖と略す)
- ・背中を拭いてもらう (以下、背部清拭と略す)
- ・家族が面会に来る (以下、家族の面会と略す)

各場面について、周囲に人がいる場面と人がいない場면을提示した (図 1)。

#### (4) 期間

2016 年 5 月 1 日～5 月 31 日



図 1 病院内で患者が経験する日常的な 4 場面

(5) 分析方法

分析は、羞恥心の度合いについて、周囲に人がいる場合といない場合の2群に分け、対応のあるt検定にて平均値の差の検定、および95%信頼区間を求めた。

3. 倫理的配慮

研究対象者の施設で、倫理規定に沿った倫理委員会の承認を得た(北海道文教大学倫理委員会)。対象者に対しては、各自の匿名性は保たれること、成績には無関係であることを書面及び口頭で説明した。なお、本研究に関して利益相反はない。

III. 結果

1. 英国文学による文献検討

ナイチンゲールの著作物からは、患者のプライバシーという言葉は抽出できなかった。そのため、ナイチンゲール病棟時代(19世紀)の「プライバシー」の捉え方をその時代の社会背景を反映する英国文学から検索した(表1)。

その結果、ナイチンゲール病棟が提唱された1860年以前の英国文学作品であるジョナサン・スィフト全集、チャールズ・ディケンズ全集、ウィリアム・サッカレー全集、ブロンテ姉妹全集の4作品において、privacyの10万ページあたりの平均が6.53回であった。それに対し、1860年以降の英国文学作品であるジョセフ・コンラッド全集、HGウエルズ全集において、privacyの10万ページあたりの平均が21.1回であり、使用頻度が増加していた。

2. 看護学生への質問紙調査

調査に同意が得られた1年生69名の回収率は100%であり、有効回答率は100%であった。調査項目のイ

ラスト4場面について、周囲に人がいる場合といない場合の平均点を比較した結果、4場面すべてにおいて、周囲に人がいる場面での羞恥心が有意に高かった(表2)。

周囲に人がいないときの平均点は、「背部清拭」「車椅子」、次いで「松葉杖」と「家族の面会」の順で高かった。周囲に人がいるときの平均点は、「背部清拭」で、次に「車椅子」「家族の面会」が同点で続き、「松葉杖」の順で高かった。

平均点が最も高かったのは「背部清拭の人がいる場面」の4.5点であった。最も低かったのは、「松葉杖の人がいない場面」の平均点1.2点で、最も恥ずかしい場面は「人がいるときの背部清拭」、最も恥ずかしくない場面は「人がいないときに松葉杖を使って歩くこと」であった。

なお、「車椅子」「松葉杖」「家族の面会」の周囲に人がいない場面の平均点が最小1.2点、最大1.4点であるのに対し、周囲に人がいる場面の平均点は最小2.1点、最大2.4点であった。

IV. 考察

1. プライバシーを巡る時代背景

ナイチンゲールの書籍も含め、19世紀に英国で出版された文献においては、privacyという言葉は、ほとんど使用されていなかった。このことから、この時代に生きた人々にはプライバシーという概念がほとんど普及していなかったことがうかがえる。

ナイチンゲールが、病棟づくりにおいて個室など人の目を避け、プライバシーを確保するような方策にこだわらなかった理由として、人々にプライバシーという概念がほとんど普及していなかったことがあげられる。

表1 英国文学からみた19世紀の「プライバシー」という単語の掲載頻度

	作者	検索本	著作初	ページ数	privacy	10万ページあたりの頻度
1860年以前	ジョナサン・スィフト	全集	1720	71738	4	5.57
	チャールズ・ディケンズ	全集	1836	363372	22	6.05
	ウィリアム・サッカレー	全集	1840	184409	17	9.2
	ブロンテ姉妹	全集	1847	94305	5	5.3
1860年以降	ジョセフ・コンラッド	全集	1895	106408	23	21.6
	HGウエルズ	全集	1895	324920	67	20.6

表 2 周囲の人の有無と平均値の関連

場面	状況	平均	(95%ci)	p
車椅子	周囲に人	無	1.4 (1.20-1.56)	<.001
		有	2.4 (2.04-2.78)	
背部清拭	周囲に人	無	2.4 (1.34-3.46)	<.001
		有	4.5 (3.88-5.02)	
松葉杖	周囲に人	無	1.2 (1.07-1.39)	<.001
		有	2.1 (1.79-2.49)	
家族の面会	周囲に人	無	1.2 (1.03-1.29)	<.001
		有	2.4 (1.98-2.82)	

by: paired-t

時代背景からみてみると、19世紀の英国は産業革命期にあり、技術革新のもと産業構造が変化し、経済が発展した。しかし一方で、劣悪な環境で長時間労働を余儀なくされる労働者が多く、感染症が蔓延した。そのため、ナイチンゲール病棟は、①感染防止、②療養環境の向上、③容易な看護観察を旨に提案された(長澤, 2020)。

その設計原理は現在でも急性期患者を対象とした病棟に引き継がれている。長澤(2020)は、建築家の視点から、ナイチンゲールが提案した隣接ベッドとの間隔(1.5m)が、現在でも通用することは驚愕に値すると述べている。

また、ナイチンゲールは、英国の思想家、ジェレミー・ベンサムらが唱えた功利主義の影響も受けられていると考えられる。ベンサムの考え方は、「最大多数の最大幸福」という言葉に集約される。これはより多くの人が幸せになることが最良の方法であり、その根底には平等性を尊重しようとする思想が含まれていた(若松, 1981)。その後、ジョン・スチュアート・ミルは、功利主義の立場をとるも「他人に害を与えない限りプライバシーは尊重されるべき」としてベンサムを批判し、プライバシーの尊重という考え方が広まっていった。こうした時代背景もナイチンゲール

ルの考え方に一定の影響を及ぼしていると推察される。

また、ナイチンゲール病棟が提唱された時代以降、プライバシーの描写が増加した背景として、病院という「場」が作り出された歴史的背景も関係していると考えられる。病院は本来、貧困に苦しむ人々を救済する目的で、教会で修道女が看っていたことに由来している。その後、病院が医療を行う場へと変化していったことで、「地下室や袋小路の共同住宅に住み、劣悪な環境の中で悲惨な生活を送っていた」階層(徳永, 2010)も入院するようになった。このことが、プライバシーという概念が広まった原因の1つであると推察される。さらに、医療の高度化がある。1846年に全身麻酔が実用化され、1866年に消毒薬が手術に一般的に使用されるようになったことも関係していると推察する。それにより、外科手術が急激に発達し、これまでは自宅で療養していた人々も家庭ではなく、治療の場が病院に移ってきたと考えられる。こうした一連の医療の高度化に伴い、中産階級以上の人々が入院するようになり、プライバシーが注目されるようになっていったと考えられる。つまり、ナイチンゲール時代前後で、患者の社会的な階級や求められる医療が変化し、プライバシーを守る必要性が生じたことが推察される。ナイチンゲール病棟を提唱した時期は、丁度その過渡期であったため、プライバシーへの十分な配慮はまだなされていなかったと考えられる。

一方、現代のプライバシーの定義について、冒頭でも述べたとおり、鈴木(2005)は、「プライバシーの定義は曖昧であり、プライバシーが守られた状態とは、公共空間からの隔離という条件は非常に重要であり、他者の視線から切り離された独立した私的な空間こそがプライバシーのある場所だ」という認識があるのではないかと指摘している。学生がナイチンゲール病棟は「プライバシーがない」「個人の空間がない」「周囲の患者が気になる」と捉えている背景には、こうした現代のプライバシーに対する考え方が影響していると推察される。さらに、スライド提示による質問紙調査の結果から、プライバシーがない場面で羞恥心があることが示唆された。

## 2. 現代の羞恥心に対する感覚

ナイチンゲール病棟は、開放的であるという特徴を有している。この特徴は、看護師と患者の双方が常にコミュニケーションを取りやすくするととも

に、患者に安心感を与え、病棟の雰囲気も明るくなるという利点を備えている。さらに、看護教育の視点からも、「書物や講義などの座学では十分な看護教育ができない。」というナイチンゲールの考えから、患者のベッドサイドを中心とする実践型の教育にも効果的である。現代においてはプライバシーの確保が困難であるという欠点を有しており(辻・松本ら 2015)、ここに着目すれば、災害時に設置される避難所も、諸条件は異なるが、広々とした空間のなかに大勢の人たちが寝泊まりをするという意味で、ナイチンゲール病棟に共通する点がある。避難所においても、「人に聞かれない話ができない」「着替えに困る」といったプライバシーの確保が問題になり、被災者のストレスの原因となっている(住環境価値向上事業行動組合 2016)。さらに、病院に入院している患者は、病変や傷を抱えており、その部位を露出し、医師や看護師に見られることを余儀なくされる。これは、大和田ら(2004)が述べるように、他者に対しての傷への羞恥心を増強させる因子となる。

今回調査した、入学1カ月の看護学生を対象としたスライド調査において、学生は、自分が患者の立場に立った場合、4つの場面すべてにおいて、周囲に人がいて、その視線に晒されていた場合は恥ずかしいと考えていることが示唆された。

坂口(1987)は、「身体接触や身体露出、また自分の身体を人に見られる、晒される事への羞恥心が顕著に見られる」と述べ、患者は診察時に常に羞恥心を感じることを指摘している。坂口(1987)の調査では、胸、お尻、おなか、性器など、普段他者に見せることのないところを見られるときに羞恥心を抱くと述べている。本研究においても、「車椅子」、「背部清拭」、「松葉杖」、「家族の面会」の4つの選択肢のうち、最も恥ずかしい場面は「背部清拭」であった。人に肌を見せることへの羞恥心はもとより、牧野他(2009)は、羞恥心の研究において「学生は清潔ケア時の羞恥心への配慮を重視していた」と述べており、医療従事者以外の人に見られる羞恥心が混在していることが考えられる。清潔ケアに関して患者は羞恥心を持つことが明らかとなった。

学生は「プライバシーが確保されない」とことと「羞恥心を覚える」ことを結び付けて考えていたと推察される。さらに、背部は日ごろ他人に見せることはないところであるため、この結果は、坂口(1987)の調査結果と共通していると言える。

本研究では、「車椅子」「松葉杖」「家族の面会」については、周囲に人がいる場面では、平均点が2.1~2.4点であり、「背部清拭」の人がいない状況の平均点2.4点と同じ点数であった。このことから、患者は、ケアを行うことへの同意を得て行なっていることや援助を受けるためには、医療従事者に自分の身体の一部をさらけ出すことは、ある程度仕方ないと考え、患者の羞恥心を軽減する要因となっているといえる。

また、周囲に人がいるときの「背部清拭」の次に平均点が高かったのが、「家族との面会」であった。家族との面会時には、身体の一部を見せる必要はないにもかかわらず、人がいるときの「車椅子」と同点であった。患者は、家族の面会によって、患者自身が日ごろ医療従事者や他の入院患者に見せていない面が晒される。このことに対して患者は羞恥心を感じると示唆された。

このように、学生が捉えた患者が感じる羞恥心には、身体の一部を晒す以外に、他者からの視線を意識するという二つの側面があることが示唆された。

さらに、ナイチンゲール病棟に対して、学生が「プライバシーがない」と捉えた背景には、ナイチンゲール病棟が設立された時代の「プライバシー」の捉え方に違いがあることが明らかになった。これは、病院が貧困に苦しむ人々のための救済の場ではなく、医療を行う場になったこと、外科手術の発達により一般の人も家庭ではなく病院で治療を受けなければならなくなったことで、よりプライバシーが重要視されるようになったと考えられ、病院においてプライバシーが確保されないことが、患者の羞恥心につながるということが示唆された。

## V. 看護教育の示唆

看護基礎教育における技術教育は、患者の心身の安楽を確保し、患者がおかれている状況を理解したケアが出来るようになることを目指している。本研究において、人が見ている環境下での背部清拭を例に挙げると、患者の心情としては、自分ひとりではセルフケアが行えない身体である、見せたくない部分が晒される、まわりの人たちに気を遣わせている、といったことが考えられる。しかも、患者の「恥ずかしい」気持ちは、その後も長く残る可能性がある。看護師が看護するのはこれらの感情をもった人間であることが前提にある。看護は、誰にでも

保障されている日常生活を支援する役割を担っていることから、看護に携わる者には、患者の羞恥心に配慮した教育が必要とされる。

川島 (2012) が述べる「その人の生きてきた過程と現在の生き方、これからどう生きようとしているのかについて近づく努力」が患者の日常生活を支援することに繋がる。これは、看護師だけでなく、誰もが持っている「誰かの力になりたい」という気持ちの延長であり、この相手の気持ちや状態を理解しようとする関係を構築していくことが羞恥心への配慮に繋がると考える。

健康な人間は、呼吸をすること、食べること、眠ること、排泄すること、それらが出来て日常生活が成立している。病気や加齢によりそれが出来なくなったとき、まずはそれまで本人が行っていたのと同じように出来るように支援することが求められる。支援においては、患者が自分自身の努力だけではニーズを満たすことができない場合に生じるプライバシーが確保できるよう、病院の環境を整えていくこと必要性が示唆された。

## VI. 結論

看護の知識に対して初学者である看護学生は、一定のプライバシーが確保されない空間で患者が治療を受ける場合、特に身体の一部を露出されるときに羞恥心を抱く、との感想と持っていた。ナイチンゲール病棟における開放感は、患者の安心感につながるとともに、プライバシーの確保の困難性と隣り合わせにある。このことが、患者に羞恥心を抱かせる要因となり得ることが示唆され、学生は、ナイチンゲール病棟は「プライバシーがない」と感じたと考えられる。

ナイチンゲール病棟が提唱された時代以前にもプライバシーという考え方はあったが、当時の時代背景から、個人を重視するというより、多くの患者を適切に看護できる体制が優先された。その後、病院が医療を行う場になったことで、貧困に苦しむ人だけでなく、通常の世界生活を営む階層も入院するようになり、医療の高度化に伴い、様々な階層の人間が入院するようになったことなどから、プライバシーが注目されるようになった。ナイチンゲール時代前後で、病院の患者の階級や求められる医療が変化し、プライバシーが必要になった。ナイチンゲール病棟を提唱した時期は、ちょうどその過渡期であっ

たため、プライバシーの概念や、階級制度の時代であったことの時代背景から、プライバシーへの十分な配慮はまだなされていなかった。ナイチンゲール病棟は、感染防止や看護観察の容易化など多くの患者を効率よく看護できる機能を有しており、その原理は急性期患者を対象とした病棟に引き継がれている。看護師は、こうした点も理解しつつ、看護活動において患者の羞恥心に常に配慮を欠かさないことが重要であると考えられる。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました A 大学の看護学生の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、第 30 回日本看護歴史学会にて発表した内容を加筆・修正したものです。

## 文献

- Collected Works of Florence Nightingale (2009). Vol. 13 “Extending Nursing” edited by Lynn McDonald, Wilfrid Laurier University Press.
- Delphi Complete Works of Charles Dickens ,English Edition. Kindle 版.
- Delphi Complete Works of Jonathan Swift,English Edition. Kindle 版.
- Delphi Complete Works of W. M. Thackeray,English Edition. Kindle 版.
- Delphi Complete Works of the Bronte Sisters: Charlotte, Emily, Anne Brontë,English Edition. Kindle 版.
- Delphi Complete Works of Joseph Conrad English Edition. Kindle 版.
- Delphi Complete Works of H. G. Wells English Edition. Kindle 版.
- Florence Nightingale (1863). Notes on Hospitals. Longman, Green, Longman , Roberts, and Green.
- 平尾真智子, 坪井良子 (2015) 日本の看護教育開始時における指導書『ハンドブック・オブ・ナーシング』—東京慈恵医院看護婦教育書の教育の実証から—日本看護歴史学会誌 28, 98-114.
- 住環境価値向上事業協同組合 (2016).「避難所が抱える問題」『SAREX News』別冊第 3 号.
- 川島みどり (2012). 看護観察と判断. 新装版, 看護の科学社.
- 牧野映里, 原田広枝 (2009). 羞恥心軽減に対する看護学生の配慮の実態と指導方法. 日本医学看護学教育学会誌, 18, 56-60.
- 長澤泰 (2020). 建築家が読む『病院覚え書』日本看護協会出版会.
- 大戸寛 (2008). 病院設計と医療技術, 川崎医療福祉学会誌, 増刊第 2 号, 15-24.
- 大和田恵里子, 柳沼望美 (2004). 腹帯を外せない患者の想い—開腹術後患者のインタビュー調査から—. 日本看護学会論文集: 看護総合 (35), 30-32.
- 鈴木健介 (2005). なぜプライバシーが問題となるのか—領域的プライバシー論を越えて—

[[http://www.glocom.ac.jp/column/2005/08/8\\_2.html](http://www.glocom.ac.jp/column/2005/08/8_2.html)]

- 坂口哲司 (1987). 羞恥心の研究. 看護技術, 33 (15), 78-84.
- 辻 慶子, 岩田 直美, 児玉 裕美, 萩原 智子, 鷹居 樹八子, 笹木 葉子, 長多 好恵, 松本 真希 (2017). 仮想ナイチンゲール病棟を用いた看護教育の試み. 産業医科大学雑誌 39 (2), 175-179.
- 徳永哲 (2010). 19 世紀中頃のリバプールとナイチンゲール. 日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report, 8, 31-41.
- 若松謙 (1981). 功利主義における道徳的規準の問題. 奈良教育大学紀要, 30 (1), 49-69.
- 山本利江 (1997). F ナイチンゲールにおける看護技術論の形成過程に関する研究. 千葉看会誌第3巻 2号, 84-90.

*Research report*

## **Design Philosophy and Privacy in Nightingale Ward**

— People's perception of privacy in the historical context —

Naomi IWATA<sup>1)\*</sup>, Yoko SASAKI<sup>1)</sup>, Keiko TSUJI<sup>2)</sup>, Maki MATSUMOTO<sup>3)</sup>,  
Yoshie NAGATA<sup>4)</sup>, Hiromi KODAMA<sup>2)</sup>, Tomoko HAGIWARA<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University

<sup>2)</sup>Division of Nursing Science and Arts, School of Health Science, University of Occupational and Environmental Health

<sup>3)</sup>Department of Nursing, Faculty of Human Science, Hokkaido Bunkyo University

<sup>4)</sup>Department of Public Health, Sapporo Medical University School of Medicine

**Abstract:**

We administered a questionnaire survey of a hospital ward designed by Florence Nightingale called “Nightingale ward” to nursing students, and obtained negative responses regarding securing patient privacy.

Given the results above, we reviewed Nightingale’s publications to learn her perspective on privacy. Our review showed that privacy was described only from the standpoint of nurses and there was no reference to patient privacy protection. In order to investigate privacy issues with the Nightingale ward, we reviewed six British literary works published during the 1860s, the period in which the Nightingale ward was proposed, to investigate how people at that time thought about embarrassment, and surveyed the extent of patients’ embarrassment that was perceived by the present-day nursing students.

Literature review showed that the social classes of inpatients and required medical care changed around the period of time in which Nightingale lived, leading to increased significance of privacy protection. The time when the Nightingale ward was proposed was exactly in the transition stage, and privacy had not been given adequate attention.

According to the survey results, the nursing students felt that patients were embarrassed during treatment, especially when parts of their body were exposed. Openness of the Nightingale ward may bring a sense of ease for patients but it also poses difficulty in securing their privacy. The results indicated that this issue may be a potential factor to make patients feel embarrassed, and the Nightingale ward was therefore considered to “lack privacy.”

**Key words:** Nightingale ward, privacy, history